

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：62618

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K16773

研究課題名(和文)自然言語における省略可能な統語範疇に関する通言語的研究

研究課題名(英文)A cross-linguistic study of elidable syntactic categories in natural languages

研究代表者

船越 健志(Funakoshi, Kenshi)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・対照研究領域・特任助教

研究者番号：40750188

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の最終的な目的は、自然言語の文において、省略することができる要素にはどのようなものがあり、省略することができない要素にはどのようなものがあるのかを明らかにすることである。この最終目標を達成するための足がかりとなるような基礎的な研究を、この2年間で行った。その結果、様々な言語の研究に応用できる可能性のある極めて一般性の高い方法論を確立することができた。今後は、この方法論に基づいて研究の射程範囲を広げていきたい。

研究成果の概要(英文)：The final goal of this study is to illuminate what kind of elements can be omitted and what kind of elements cannot in a sentence of natural languages. I have been engaged in a basic research on which this final goal can be achieved. As a result of this research, I established a methodology that has a potential to apply to various languages. I would like to extend the range of research based on this methodology in the future research.

研究分野：言語学

キーワード：理論言語学 統語論 省略

1. 研究開始当初の背景

生成文法における省略の研究では、ある特定の範疇に関してそれがどのような条件のもとで省略可能であるかが議論の中心であった。例えば、英語の疑問詞疑問文における疑問詞が*when*のような付加詞である場合は、(1a)が示すようにVP省略が許されるが、(1b)が示すように*which one*のような項である場合はVP省略が許されない(文頭の*はその文が非文であることを、取り消し線は省略を表す)。

(1) a. I think you should adopt one of these

puppies, but I don't know **when** you should
{_{VP} ~~adopt one of these puppies~~}.

b. *I think you should adopt one of these

puppies, but I don't know **which one** you
should {_{VP} ~~adopt~~}.

このように原理的には省略できる範疇が、なぜある条件のもとでは省略できなくなるのかが研究されてきたわけである。

一方、ある言語では(原理的に)省略可能な範疇が他の言語では全く省略不可能であるといった言語間差異やすべての言語で省略不可能な範疇があるといった普遍的事実に関してはこれまであまり注目されてこなかった。例えば、英語では(1a)で見たようにVPを省略することが原理的に可能であるが、(2)が示すようにフランス語ではこれが全く不可能である(スペイン語、イタリア語なども同様)。

(2) *Anne voulait manger des moules et

Anne wanted to eat some mussels and
elle a {_{VP} ~~mangé des moules~~}.

she has eaten some mussels

'Anne wanted to eat some mussels and she
has eaten some mussels.' (フランス語)

また、著者の知る限りAPを省略できる言語は(叙述用法を除いて)存在しない。このような省略可能な範疇に関する言語間差異や普遍的

事実を体系的に調査・議論した研究はこれまでにない。

2. 研究の目的

本研究の目的はこのようにこれまで注目を浴びてこなかった、省略可能な範疇と不可能な範疇に関する言語間の違いおよび普遍的事実を体系的に調査することである。言語間差異がある場合は、その差異がそれぞれの言語のどのような違いに起因するののかも議論する。

3. 研究の方法

上記の研究目的を達成するために、一年目である平成27年度はVP省略、CP省略および項省略(DP省略)に関する通言語的研究を行い、平成28年度は日本語のように疑問詞が義務的に移動しない言語における疑問節縮約(IP省略)の研究を行う。研究の性質上、様々な言語のデータを必要とするが、データの収集方法は、生成文法の枠組みで伝統的に用いられてきた母語話者の内省に基づく容認度判定を使用する。さらに、補助的なデータ収集方法として文献調査を用いる。

4. 研究成果

ある任意の言語においてCP省略やDP省略が可能であるかを決定するためには、その言語においてVP省略、特に動詞残余型VP省略が可能であるか否かをまず決定しなければならない。例えば、(3)(4)のような文が可能であるという事実から、日本語はCP省略およびDP省略が可能であると結論づけることはできない。

(3) 太郎は花子が天才だと思っているみたいだけど、僕は{_{CP} ~~花子が天才だ~~}と思わない。

(10) John often [_{VP} kisses Mary].

(11)*John kisses often [_{VP} t_{kiss} Mary].

したがって、動詞残余型 VP 省略の可能性を検討しなければならないのは、動詞移動が存在する言語だけでいいのである。

英語やフランス語のように主要部先行型言語の場合は(10-11)のように、動詞と文中の他の要素との相対的語順を見るだけで、比較的簡単に動詞移動の有無を確かめることができる。一方で、日本語や朝鮮語のような言語は主要部後置型なので、語順によって動詞移動の有無を確かめることができない。したがって、主要部後置型言語における省略可能な統語範疇の研究にとって、語順以外の手がかりで動詞移動の有無を調べるための統語テストの開発が重要である。

学会発表①②では、このような問題意識の元で、日本語のデータに基づいて、VP 前置を利用した統語テストを提案している。日本語は語順が比較的自由であるが、VP を文頭に前置する際には厳しい制約がある。(12)が示しているように、前置された VP の動詞に「さえ」のようなとりたて詞を付加して、時制辞に「し」のような虚辞をつけなければならないのである。

(12) [_{VP} リンゴを食べ*(さえ)], 太郎が t_{VP}
*(し)た。

学会発表①②では、このような制約、特に前置された動詞に何かが付加されなければならないという制約の存在が、日本語における動詞移動の存在を示唆していると結論づけている。もしここでの議論が正しければ、動詞移動の有無を調べるのに語順を手掛かりにできない主要部後置型言語においても、VP 前置に関する制約を調べることによって、動詞移動の有無をテストできる可能性があるということになる。

以上、見てきたように、この2年間の研究を通して、CP 省略・DP 省略の可能性を調べるために必須である動詞残余型 VP 省略の可能性を調べるための統語テストの開発、および動詞残余型 VP 省略の前提条件である動詞移動の可能性を調べるための統語テストの開発に関しては大きな進展があった。今後は、これらの基礎的な研究を足がかりに、様々な言語の研究に広げていきたい。また、今回は残念ながら IP 省略の研究に着手することができなかった。こちらも今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Funakoshi, Kenshi, Backward control from possessors, *Syntax*, 査読有, Vol. 20, issue 2, 2017, pp.170-213
DOI: 10.1111/synt.12134

② Funakoshi, Kenshi, Verb-stranding verb phrase ellipsis in Japanese, *Journal of East Asian Linguistics*, 査読有, Vol. 25, No 2, 2016, pp. 113-142
DOI: 10.1007/s10831-016-9143-8

[学会発表] (計7件)

① Funakoshi, Kenshi, VP-fronting and verb-raising in Japanese, *Comparative Syntax and Language Acquisition* 7, 2017. 4. 23, 南山大学 (愛知県名古屋市)

② 船越健志、日本語の動詞移動に関して、「日本語から生成文法理論へ：統語理論と言語獲得」第一回研究発表会、2016. 12. 27, 国立国語研究所 (東京都立川市)

③ 船越健志、動詞残余型動詞句削除分析、日本語学会第152回大会、2016. 6. 26, 慶應義塾大学 (東京都港区)

④ 船越健志、意味役割としての内面的参加者の言語学的有用性、レキシコンフェスタ4、2016. 3. 4, 自治大学校 (東京都立川市)

⑤ 船越健志、付加詞脱落と擬似空所化、日本英文学会関西支部第10回大会、2015. 12. 20, 武庫川女子大学 (兵庫県西宮市)

⑥ Funakoshi, Kenshi, Backward control from possessors in Japanese, *南山コロキユーム*, 2015. 12. 12, 南山大学 (愛知県名古屋)

屋市)

⑦ 船越健志, Silent external possessors in Japanese, 言語学講演会、2015. 11. 20, 東北大学 (宮城県仙台市)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 件)

[その他]

ホームページ等

<http://researchmap.jp/funakoshik/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

船越健志 (FUNAKOSHI, Kenshi)

国立国語研究所・理論・対照研究領域・特任助教

研究者番号 : 40750188

(2) 研究分担者 : なし

(3) 連携研究者 : なし

(4) 研究協力者 : なし